今 治　＜愛媛県今治市＞　日本最大の海事都市

近くのまちあるき　尾道　松山　丸亀

今治市役所には、「日本最大の海事都市」の横断幕が上がっていました。

日本などの海運国では、海運、船主、造船業、舶用工業から船舶金融、海上保険に至るまで、幅広い業種が地域で深く結びつき、海事クラスター（複合体）を形成します。
今治市は、その最大の都市というのです。

今治造船をはじめ、今治市の造船会社はグループ全体で、国内30％のシェアを誇ります。
また、船舶用機器の製造所も集積するため、海事産業が牽引する今治市の製造出荷額は、四国で一位になっています。

多くの船主も市内に存在し、保有船舶の国内シェアは、外航船舶の30％、内航船舶の8％を占めます。
そのため、海事系の法律事務所や保険会社、金融機関などのサービス業も立地しています。

日本最大の海事都市となった背景には、地理・歴史的な理由があったようです。

古くから瀬戸内水運の難所であり、周辺海域は村上水軍の拠点となっていました。
江戸時代は「海城」今治城の城下町として発展、戦後は造船の町として隆盛しました。

しかし、造船不況としまなみ海道の開通は、今治のまちなみを大きく変えたようです。

造船所　島影に点在する巨大鉄工所

伯方島木浦地区の風景

今治造船所　（会社リーフレットより転載）

昭和30年台、今治の周辺で造船所の建設ラッシュが始まります。
昭和50年頃、日本の建造量は世界の半数を占め、今治は造船王国の一角を担います。

いまでも、今治造船グループは世界5指に入る日本一の建造量を誇ります。
市内には14の造船所があり、日本国内で建造された船舶の15～20%を占めています。

造船業は、関連業種の裾野が広く「総合組立産業」といわれ、多くの労働者が現場で作業する「労働集約産業」でもあります。
しまなみ海道沿いには、多くの造船所が、島影に隠れるように、ひっそりと立地しています。
しまなみ海道の開通以前、従業員や関連部品が着く島の港は、たいそうな賑わいであったことが想像できます。

今治城　日本屈指の海城

関ヶ原の戦の功により、伊予半国20万石を得た藤堂高虎が、瀬戸内海に面した海岸に今治城を築きます。海水が引かれた広大な堀や、城内の港として国内最大級の船溜まりを備えた、日本屈指の海城でした。藤堂氏の伊勢国津城転封後は、寛永12年（1635）から松平（久松）氏の居城となります。

天守閣は昭和55年に再建されたものです。右遠方に見える高層ビルは今治造船の今治国際ホテル。

城下町の名残りがある明治期の地形図をみると、今治城郭の大きさがよくわかります。

写真の水面は内堀で、航空写真でみても、とても大きなものであることが分かります。

城郭は外中内の三重堀になっていて、城下町は海沿い北側に配置されていました。

今治駅と市役所は町外れにおかれました。

かつての城郭内で内堀の外側は、今ではびっしりと市街地になり、旧城下町には古い町並みが少しだけ残っています。

変わる町並み　造船不況としまなみ海道開通後

今治港の近くには、昭和40年代後半から百貨店などの大型店舗が相次いで開店し、今治港から中心部のドンドビ交差点にかけてアーケード街が建設されます。

今治大丸、今治高島屋、ニチイ、今治ショッパーズプラザ（ダイエー）などの大型店舗が軒を連ね、かなり活気があったようです。

しかし今では、これらの大型店舗も相次いで閉店し、アーケード街もシャッターが閉まる店舗が目立っています。

校外大型店の進出、造船不況、しまなみ海道開通などが、大きく影響しているようです。

今治港から駅への道

立派だが閑散としたアーケード街

今治港湾ビル　海上保安庁などが入るが、閑散としている。
海上には数本の桟橋が並ぶが、賑わっている様子はない。

今治からは、広島、神戸などへの遠方だけでなく、しまなみ海道沿いの因島、大三島、伯方などにも一日何便ものフェリーが運航していました。
島に点在する造船所に工員を運んでいたのです。

昭和50年頃の最盛期、年間300万人の乗降客を誇った今治港ですが、造船不況の影響もあり、しまなみ海道開通直前までに180万人まで落ち込みます。

しまなみ海道開通（平成11年）後には、乗降客数はさらに半減し、海道全通後は7～80万人まで落ち込んでいます。

今治港にはたくさんの桟橋が残っていますが、これらは、造船業最盛期の名残りのようです。

今治市役所

今治は丹下健三が育った町です。
市役所は昭和33年、丹下の設計で建築されました。
典型的な丹下モダニズム建築です。

海事都市の成立ち　瀬戸内水運の難所

今治が海事都市となったのは、地理・歴史的な必然がありました。

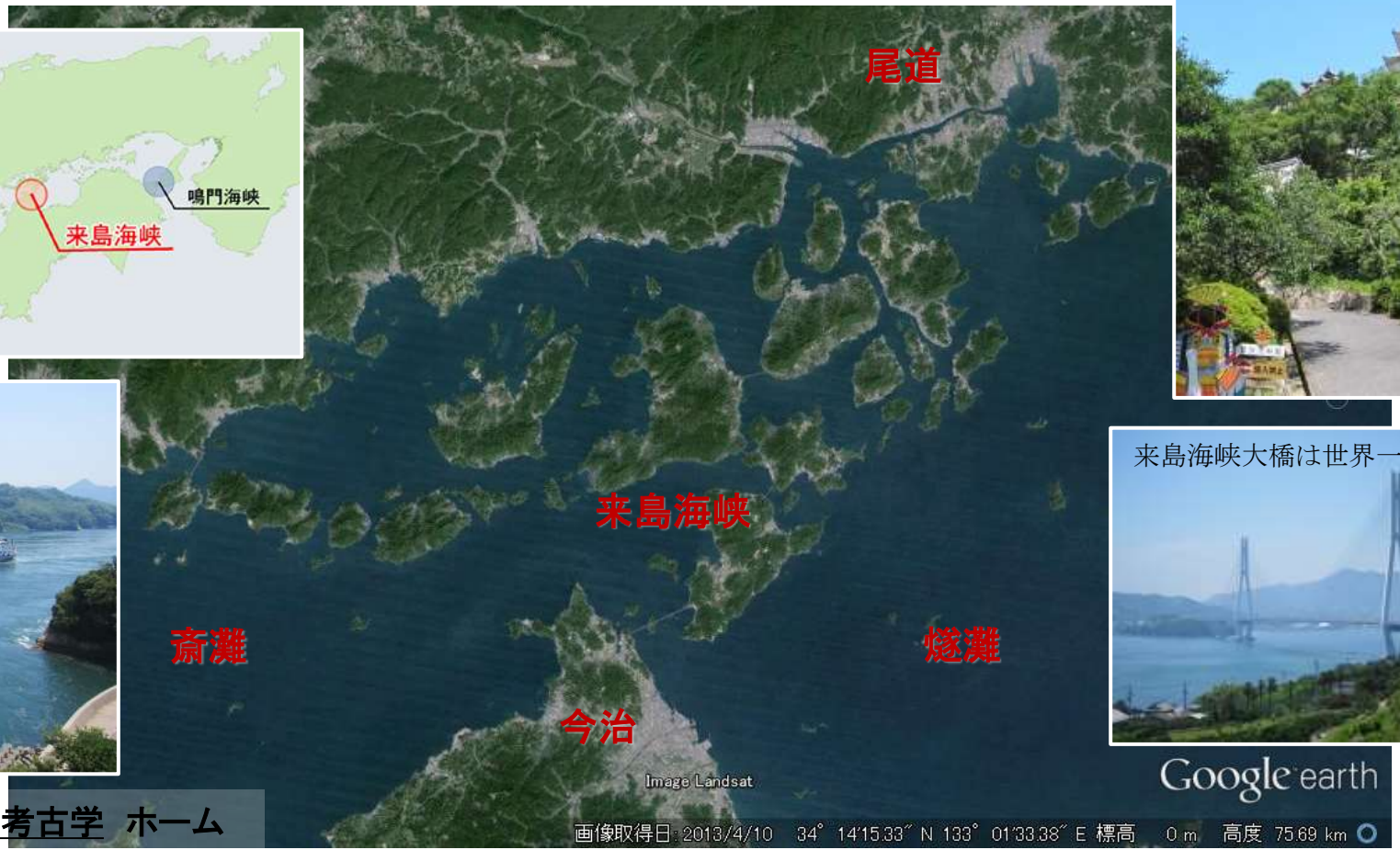
今治の先にある来島海峡は、西の斎灘（いつきなだ）と東の燧灘（ひうちなだ）とを隔てる海峡です。
瀬戸内の中央部にあるため、潮位変動が大きく、点在する小島の影響もあって、潮流は速く、ところにより複雑な流向をとり、古くから瀬戸内水運の難所といわれてきました。

そのため、この海域は古来より水軍（村上氏）の拠点となります。

水軍は、因島、能島、来島を拠点にした海上の武装集団で、南北朝から室町・戦国時代を通して、歴史にその名を残しています。

水軍は、港湾、海運、造船などの海事産業の基盤となりました。

江戸初期に今治城を築城した藤堂高虎は、当時主流だった平山城ではなく、海港を備えた海城としたのも、水軍を配下におき、その拠点としたためかも知れません。



村上水軍の因島城

急流の来島海峡

来島海峡大橋は世界一の斜張橋